会報
19号

れきふう

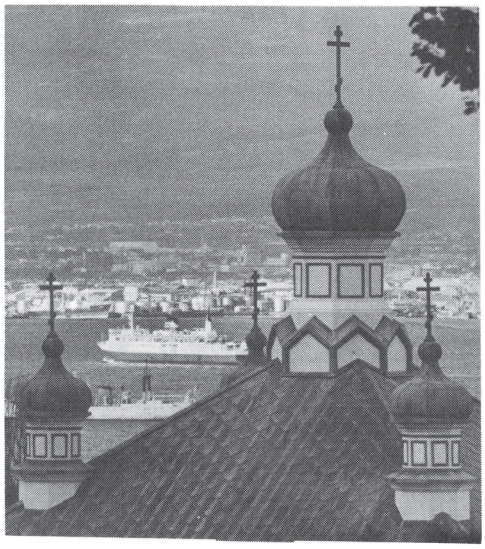
函館の歴史的風土を守る会会報
No. 19　S 60.3.3
発行所　函館の歴史的風土を守る会
事務局　函館市五稜郭町43—9
五稜郭タワー株式会社内
電話（0138）51—4798
印刷社　双葉印刷　☎53—7730番

第2回歴風文化賞

函館の原風景として「連絡船のある風景」

歴史的風土の形成に寄与する団体として「華僑総会」

第7回「町並みを美しくする新春チャリティーパーティ」1月25日会場で表彰式



「歴風文化賞宣言」

〝連絡船のある風景〟

函館港に出入りする青函連絡船の姿は港町の詩情を残す函館の原風景であります。

数々の人生を運び、海峡のドラマを生み出した連絡船は、背景の函館山・西部地区の町並みと美しい調和をかもし出しこの地に住む者へ、勇気と愛着と誇りを感じさせてくれます。

ここに歴風文化賞に値するものとして宣言します。

……

北海道函館華僑総会　殿

七十五周年を迎えた中華会館は函館市西部地区の歴史的建造物の中で中国清朝期の文化を忠実に日本に伝えた国内唯一の建物です。

同市船見町の中華山荘を含む長年の維持保全に尽され広く一般に公開するなど中日友好に寄与すること大であります。これらの努力に謹んで感謝の意を表します。

歴風文化賞選考にあたって

代表　豊山孝雄

函館のらしさを象徴する歴史的建物や原風景がいつまでも、街の顔であってほしいと、第2回歴風文化賞選考会を実行委員長が招集し10名が参画した。多忙な年の暮れから表彰当日（町並みチャリティー）迄10数時間かけ、町並みへのスジ論、心情論を熱っぽく論じ検討を重ねた。原則として最高の栄誉に輝く、国・道・市指定文化財は対象外とし、一応、表彰の基準を次の様に決めた。①建物自体の貴重性、②持ち主が長年保存への努力を続けている。③景観への寄与、④歴史性

以上の外に今回新しい部門として保存再生の建物に対し、⑤地域の町並みや社会全般へ波及効果が大きい⑥諸々の制約の中で創意工夫が顕著である。等である。

第2回歴風文化賞は次の通りです。

- 保存建築物の部門　＝大町郵便局・日下部邸・大正湯
- 保存再生建築物＝川越電機　小林邸（対象は59年内）
- 町並み形成に貢献している団体＝華僑総会
- 町並みと一体をなす原風景＝連絡船のある風景

日夜保存への努力を傾けられておられる持ち主の方々に改めて敬意を表します。歴風文化賞選考を精力的に取りくんだ委員の皆さんご苦労さんでした。

「歴風文化賞」
函館大町郵便局　殿

貴局舎は、明治43年に建てられ函館の洋風建築の伝統と格式を今日に伝える優れた歴史的建築物であります。長年に渡りその維持保全に尽され、函館市西部地区の町並みに潤いを与えています。その努力に謹んで感謝の意を表します。

★大町郵便局は明治43年に建てられました。
明治末期の洋風事務所建築の手法をよく伝えております。
特に当時２階中央に露台（バルコニー）がついていました。上部三角のペディメントがその当時の思かげをよく残しています。
内部は非常にきれいに使われています。

「歴風文化賞」
日下部　きよ　殿

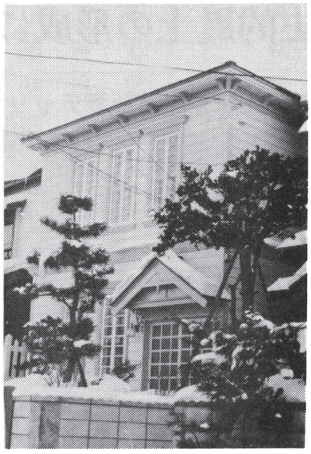
貴邸は大正４年に建てられ函館の歴史的和洋風建築群の中で伝統と格式を今日に伝える和風建築物であります。長年に渡りその維持保全に尽され函館市西部地区の町並みに潤いを与えています。その努力に謹んで感謝の意を表します。

★日下部邸は、大正４年に建てられ、本州の木曽から桧木の原木を船で運び、約３年の歳月をかけて完成しました。
蔵を持つ中廊下型の和風住宅であり、格子戸は杉材木の桟で飾った板壁は重厚さを感じます。
昭和43年の十勝沖地震以前は鬼瓦のついた、どっしりとした住宅でしたが、瓦が落ち、道を歩く人や、他の物への危害を与えてはならないという心くばりから現在の屋根にし保存に努力しています。
内部は桧木やけや木で所々に素晴しい彫ぼりが見られます。

「歴風文化賞」
小武　茂　殿

大正湯の建物は昭和３年に建てられ函館の洋風建築の伝統と格式を今日に伝える優れた歴史的建築物であります。長年に渡りその維持保全に尽された函館市西部地区の町並みに潤いを与えています。
その努力に謹んで感謝の意を表します。

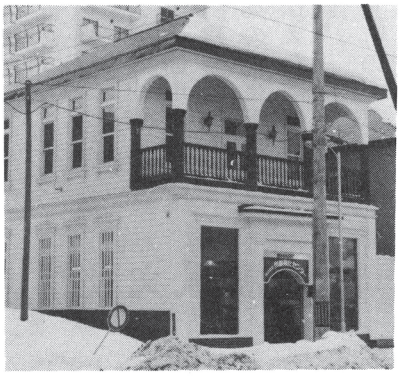
★大正湯は、昭和３年に浴場の上部に居室を設けた草創期の建築物で、木造下見板張、洋風の縦長窓、持ち送りで支えられた庇、胴蛇腹の外観、上下和洋折衷の様式で特に間口と高さとのつりあいは美しく、下見板の色彩は街並みに明るさを与えています。
フロコミニティーのセンターとして地域の人々の集会所として親しまれています。



「歴風文化賞」
小林　敏夫　殿

函館市西部地区の伝統的な町並みの中で大正期の想いを再生した改築を行いました。
それは歴史的な町並み保存の推進に与えた影響は大きくその努力に謹んで敬意を表します。

★小林邸は、大正１１年に建った板張り、縦長窓のあるモダンな家でした。
大正期の民家として保存してきましたが、昨年建て替えを決意し、新築をやめ、街並保存の立場から、道路に面した部分はそのまま再生することでよみがえらせました。
個人住宅として街並み保存に努力された事に敬意を表します。



「歴風文化賞」
株式会社
川越電機商会　殿

明治４０年に建てられた貴商会電化センターは函館市西部の伝統的な街並みの中で明治期の想いを再生した改築を行いました。歴史的な街並み保存の推進に与えた影響は大きくその努力に謹んで敬意を表します。

★川越電機商会は、電車通りに面して白い下見板の壁と縦長窓、そして一番目につくのが緑色の支柱に支えられた半円形ポーチのバルコニー。この建物は明治４０年当時、函館の中心街だった末広町に建てられた洋風の木造２階建である。当時の力強さとそのエキゾチックな外観をみごとに復原した事は街並みに明るさをもどらせている。

受賞にあたり

—日下部きよさんの談話—

この家は主人の誕生祝いにと祖父久太郎が大正4年に建造したもので3年がかりで完成し今年で71年目になります。私と同じ年代を生きた家ですから 格別執着が深いのです。階段の下のクサビの打ち方が見事でガッチリと木が組み込まれて釘を使っていない。常傭いの大工さんが楽しみながら丁寧に時間をかけてきっちりと造っているから毀してしまうという気持にはなりませんでした。どこもつるつるとなめらかで手のひらでなでてみると木の命が伝わってくるように思われて気持がいいのです。木曽の山から切り出した原木を海運業を営んでいた祖父が船で運んだといういい木ですから手入れに答えてくれる。木は生きていて魂があると思うからそう簡単に毀そうとは思われませんでした。この度は歴風文化賞を思いがけずいただいて本当に光栄に存じます。何とか維持して住み続けていきたいと思っています。

どなた様か、たのもうという風格の家とおっしゃっていましたが、私は古いものが好きです。格子戸と障子からこぼれる月の光は美しいですよ。

＝きちっとした和服姿でしっくい塗りの倉のある広い玄関に座して見送って下さった日下部きよさん。格子戸をくぐり抜けて端麗に坐しているきょさんに目礼した一瞬、古き良き時代の重味をずしりと感じさせられました＝　（文責　三上　哲子）

ーチャリティパーティの感想をひとことー

❀年1回のパーティで、函館の街の良さを知らせていただいています。

イカ踊りですが、来年はお面をつけてみては、私も一緒に踊りたかったので……。　T

❀イカ踊りを初めて見ましたが、とても面白く、良かったと思います。

ダンスは若い人も多いので、今ふうのディスコダンスも入れて下さい。　K

❀企画もよく、たのしめるパーティーでした。唯、残念でならないのは歴風文化賞発表の折、大事なお話しはそっちのけでガッガッ食べている風景でした。セレモニーの時はせめてエチケットとして耳を傾けてほしかったです。

次回からセレモニー終了後、乾杯//を合図にのんだりたべたりを始められては如何でしょうか。　M

パーティーが終って

チャリティー実行委員長　村　岡　武　司

「函館の町並みを美しくする新春チャリティパーティ」を無事終える事が出来ました。由緒正しい歴風会の大切なイベントの実行委員長とは身に余る光栄でしたが優秀なスタッフが揃ってまして、恥をかく間もない位しっかり支えていてくれたというのが実情です。私がやった事といえば、終盤のイカ踊りに飛び入り参加。手と足をピクピク痙攣させただけでして、あとはテーブルとテーブルの間をビールを求めてうろついている間にパーティは終わったというところです。

このイカ踊りですが、大変おもしろいと思いました。大門のスナックから自然発生したらしい集団パフォーマンス、出現のしかたが唐突だったせいか、参会の方々に馴じむ暇がなかったのは残念でしたが、踊ってみると（私はそのつもりでした）阿波おどりとかねぶたに共通する単純化されたエネルギーといったものが感じられました。衣裳などに工夫を凝らせば、多くの市民の支持を得て大きく育って行くような気がしました。応援したいですね。

もう1つ、“乱発”の意見もありました歴風文化賞にふれてみたいと思います。この賞の性格ですが、歴風会からの意志の表現、つまり町並みの美しさを大切に守る立場から同志としての連帯を結ぶ儀式であると言えるでしょう。その意味で函館にはこの賞に価する人、あるいは物がとても多いと思いますし、又、それこそが函館の魅力でもあります。

しかし、その方法として毎年毎年順番に小出しに賞を差しあげるのが最善かというと違うと思います。

数にこだわらず賞に価するものはまず全て表彰いたしましょう。一通り行き渡ったなら、次に、誰もが認めるものを改めて表彰するのではなく、独自の視点から魅力を発掘し育てる為の表彰を行うというのが歴風会らしいと思います。

そんな訳で今回は6件表彰いたしましたが、来年も気前良く賞を出して頂きたいですね。

その他諸々御挨拶及び御礼を申すべき事もありましたが、明るく温い五稜郭から暗くて寒い西部に戻って感じた事を書きました。いずれこちらの方にも春が来るでしょう。私達ユニオンスクェアのメンバーと西部地区の有志はその日に催す楽しいイベントの準備にとりかかりました。その時にまたお目にかかりたいですね。　（ユニオン・スクエア内・おみやげ店　かもめの水兵さん・店主）

都市の美学を求めて

東北都市研究体代表　小杉八朗

1　都市の条件

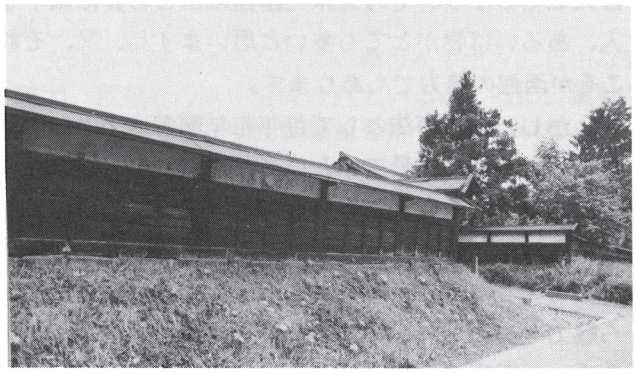
都市とは「人間の創造した最高の芸術である」と私は定義する。その都市が、芸術であることを放棄したときから、構成者たる「ヒト」の崩壊が始まる。

人間社会の形成には、文化遺産の継承・発展の比重が大きく、「伝統」の位置どりを誤まると、都市形成自体が不均衡となる。現代は、その限界状況にあると診ている。「名水百選」とか、仙台市での「広瀬川の清流を守る条例」、あるいは東京都の「隅田川」にしても、歴史と伝統への回帰であり、〝培われてきたもの〟〝受け継がれてきたもの〟が現代生活にとって、いかに重要であるかを示している。

都市の条件の第一は、居住性を持つことである。「人が、快適に住める」・「生きられる」環境があるかどうかということである。

第二に、行政上の「市」と「都市」との範疇を区別すること。行政的の「市」には、人口5万以上、中心市街地形成の戸数比（６０％以上）、都市的業態の構成比（６０％以上）などについての規制がある。

「市」は都市の構成要件ではあるが、「都市」たり得るには、風格・格位が必要だ。この風格・格位が都市の第二の条件である。これを支えるものとして、その都市の自然的・社会的背景が考えられる。しかし、私は、都市のもつ歴史性が土台になると思う。



弘前・新寺町寺院街

第三の条件として、その「都市」が、芸術性を保有しているかということを挙げたい。さきに、私は「都市とは、人間の創造した最高の芸術である」と定義した。県庁も、百貨店も、すべてそのまちに住む人々の創造したものである。施設や設備が調和よく存在し、都市生活者としての市民が、快適なくらしができる、明日への夢がつなげる状況に在る、そのことが大切なのである。そのためには、市街地に、楽しくショッピングできるようなプロムナード風の商店街も必要であろうし、モニュメントの存在も必要だ。

第四に、「都市性格」に対応する「都市力」を有することである。仙台を例にとると、これは、歴史的都市であり、旧城下町であり、また、東北の一大拠点都市でもある。これが「都市性格」である。それでは、「都市力」とは何か。簡単に言えば、都市の重さということになる。都市力の構成要件としては、民力としても表現できるであろうし、具体的には、工業出荷額・市民所得・住宅保有率（マンションを含む）、学歴（あるいは学力）分布・新聞・図書購読率など、さまざまな視座が考えられる。

仙台は、「杜の都」といわれる。元来、「森」が自然的の意があるのに対し、「杜」は人為的の意味をもつ。文献によれば、「杜」を冠したのは、大正4年頃からとある。このことは、大正初期から既に、緑化への姿勢が積極的であったことを物語っている。

いま、仙台で、開発が進行しているが、地肌の露出した部分に、直ちに苗木をといった手法が併行している。これは、都市力の一端を覗かせたものといえよう。

2　町並を考える

都市について、大まかに、4つの条件を提示した。これは、私の都市への視座である。

いま、ここで、都市と町並の関わりについて考えてみたい。藩政期、津軽藩外港としての歴史性をもった港湾都市青森、そして、幕末期、いわゆる「北の窓」としての先導的役割を果たした函館。ともに港町である。だが、いまの青森に、港町としてのアトモスフェアがあるだろうか。対向都市函館。連絡船からみたこのまちの景観は、青森と対比して、情緒に富んでいる。つまり、都市景観性で優位に立っている。元町界隈をベースに、建築遺構もよく保存されている。青森は、どうも「海からの景観性」に乏しい。港町固有の「坂」が無い。「坂」が無いという平板さは、そこで生活する人たちにも投影する。すなわち、心奥の襞に微妙に影響する。地形の単純さを補うのは、個性的な建造物であり、都市公園（特に青森の場合は海浜公園）であり、そして、街並である。そこで、「都市の美学」といった都市哲学が要求される。

東北では、弘前・黒石・鶴岡・米沢・遠野・登米（とよま）のように、歴史的景観性の高い地域が、日本海ラインと、内陸に集中している。資本の論理から取り残された地域、すなわち後発地域ともいえる。逆にそのことが、「都市の個性」と「伝統美」を維持可能なものとも、歴史空間を現在まで温めてきたのである。

そして、これらの都市は、戦禍をうけなかったことで、より容易に文化遺産や歴史的景観を維持できたと

いえる。

しかし、これらの都市にも問題がないわけではない。ある都市でみられるように、歴史的系譜のなかに忽然と位置どりされた異質の文化が、いつの日か訪れる可能性を孕んでいる。つまり戦後再建された鉄筋コンクリートの天守閣に、その断片を看取ることができる。時代の重みを支える石垣の上に、「木と土」を素材に築かれた建築遺構に代わって、「鉄とセメント」で構築された空間は、まことにアンバランスである。経済性・耐火性・耐震性の大義名分のもと、歴史的都市景観が失われていく。

北限の五重塔
―弘前市銅屋町―

その論理は、「歴史の否定」へ通ずる要素さえ含んでいる。

3　結びにかえて

昨秋10月、「函館の歴史的風土を守る会」の方たちと、「城下町・弘前」の街並探訪をさせていただいた。せっかく、ご案内したのに、「和徳こみせ」が、道路拡幅の整理事業で、姿を消していた。歴史のまち弘前にして然りである。「伝建指定地区」となった仲町の「武家屋敷街」にしても、これから、長い時間を費して、歴史の町なみを形成していくことであろう。いまの弘前は、「弘前公園」それ自体を、町なみとして位置づけることが必要なのではないか。「核」を守り、育て上げていくこと、それが、弘前をより一層、風格ある歴史的な都市にする土台となると考えている。城門・櫓・天守・堀などの遺構保存度の高いエリアー帯を町なみとして受けとめる。これが、新しい町なみ保存の発想ではなかろうか。

心に残る弘前

伊藤鞆子

たった一度の、短い弘前の町との出会いでしたが、心に残る沢山の嬉しい楽しいことに恵まれました。

それはきっと、弘前の町を深く愛していらっしゃる小杉先生という、名案内役のお力によって、もたらされた出会いだと思い、優れた方に出会うのもまた、得がたい勉強だと思い返しています。

紅い林檎の平野を横切っている時、岩木山は見えませんでした。

城跡の掃き清められた広場を真すぐ端まで歩くと、岩木山に会いました。

青い澄みわたった空を占領して、悠々とたっぷり裾を広げた高い大きな山でした。

白い天馬が翼をはためかせ翔ぶのかもしれない、どうしても頂をめざしたくなる、懐でごろんと寝ころんでみたくなる、そんな山だと思いました。

猛々しい荒ぶった心で、山を越えて去る人もいるかもしれない。山に負けまいとして燃える日々を送る人もいるかもしれない。淋しくて山を忘れる人もいるかもしれない。でもやっぱり山を偲んでいる、そんな山だと見上げました。

もうひとつ、町の風景も忘れられません。「コミセ」と呼ばれる一角に近づいた時、そのあたりから懐しい優しい雰囲気が漂っていると思いました。

2、3年前高い評価をうけた絵本に、このような街を描いたものがありました。

なぜ子ども達がこの絵本を好きになり、おとなたちも感動したのでしょうか。

古い物への郷愁などへは、子どもは興味を示しません。その本の中に良いもの、心を解き放ったり、包んでくれたりする〝育てる文化〟のようなものを感じたからではないか、と思います。

町並を残すというのは、こうしたことに通じるのではないかと、少し理解できたような気がいたします。

古い商家や武家屋敷などは、その土間というのか、女の働いた場所に立っと、陽の当たらない仄暗い一角で女たちは、人として倖せであったのだろうかと、時の流れを逆上ってきいてみたい心具合になってしまうのです。

勿論、充実した日々、母や妻としての充実した日々を、それぞれが送ったに違いないとは思うのですが。

何気ない旅では味わえない、濃い深い旅でした。

おそば屋さんの二階で棟方志功の絵を、初めて見て感動したこと。

そのことから、太宰や長部など東北の風土が生んだ人たちのことに思いが流れていったこと。

忘れないでおこうと思います。

川嶋先生を悼み

越野　武

川嶋龍司先生の訃に「まさか」の想いであった。多くの方々も同様ではなかったか。この数年、病を得てはおられたが、要めの集まりなどには「病院をぬけてきたよ」と言いながらいつも顔を出されていた。第一先生は顔つきも、お話ぶりも（毒舌ぶり）も若々しかった。先生とのおつき合いは２０年をこえるが、初めての頃から少しも変わらなかったように思う。

先生とのおつき合いは、そのまま函館のまちと建築とのつき合いであった。北大の助手になりたての頃―昭和37年―初めて函館の明治建築を見てまわり、当時病床にあった故村田専三郎先生の教えをいただいた。その案内役が、お弟子さんの川嶋先生であった。村田先生は、もう手や口の動きが不自由で、お話の聞きとりづらいところ、沢山いただいたお手紙の読みづらいところ、皆川嶋先生をわずらわして解説してもらうのである。あれこれと村田先生の指示する建物へ連れていって下さるのも、勿論川嶋先生であった。

村田先生は良いお弟子を持たれたものである。村田先生の「函館のエ匠小伝」が川嶋先生の『はこだての文化財・古建築篇』に校丁再録されたことはよく御存知の通りである。おふたりは函館の建築文化の支柱だったと言ってよいのではないだろうか。

いつも思うことだが、人口十万をこえるほどの都市なら、そこに根を生やした建築家がいなければならないのだが、これが日本では一土建屋風のボスは別として一まことに少ない。その数少ない都市に函館は入るであろう。公会堂をつくった小西朝次郎から、先年亡くなられた小南武一さんまで、根性のある建築家が函館には連綿として続いてきている。下世話にいえば、東京や札幌あたりの建築家が、出稼ぎには行けぬようなところがある。その上、村田先生や川嶋先生が一御自身でも設計されたが一建築史の研究と啓蒙を通じて、函館の建築に太い文化的な背骨を通してこられた。ひとつの地方都市で、すぐれた建築家と建築史家が、手をたずさえて伝統を育んできた、というのは、日本の建築風土にあってほとんど奇蹟に近い。

今、川嶋先生が亡くなられて改めて思うのだが、すぐれた歴史的建築や町なみも、決して黙って存在するのではない。誰かが発見し、また育てるものだと思うのである。

村田先生から川嶋先生へ継承されたものは、また誰かが継いでくれなければならない。いや、函館なら必ず継がれていくはずだと思うのである。川嶋先生の御冥福を祈りつつ。

（北海道大学工学部助教授）

會田金吾

昭和60年1月22日、市教委から昨日午後3時ころ、ご逝去された旨の訃報をうけた。一瞬まさかと耳を疑った。というのは58年、肝臓が悪いとかで入院し、半年程で退院して、いろいろな会合に出席され、59年9月には市文化財保護審議会で、お会いし実のある意見などを笑顔で述べていたからである。

川嶋さんは「函館の歴史的風土を守る会」副会長として古建築などのリストアップの指導に当たられていた。

同氏と私とは、旧制庁立函館工業の同窓で、私は一年上であった。下級生に背が高くて、よく目立つ色白な建築科生が居るなー、と思っていた。当時の土木、建築、工芸、他2科を合わせての同期生は、今と違い少なくて200人程度、3年制の全校としても600人にも満たない人数であった。各科対抗の試合では、少ない生徒数なので自然に名前や、特徴も判るのである。同氏は昭和19年4月、母校の窪田校長の要請で教員となり、戦時中や終戦直後の建築専門教員の少ない中にあって多忙な教鞭を精力的にとり続けた。

私事で恐縮だが、19年と言えば戦局不利な時で私も教員。大湊要港部管理の日魯造船青年学校造船学を担当、そして人間魚雷艇の建造に担ずさわっていた時分であった。

同氏との深い思い出は、私の戦後の勤め先、函館公海漁業㈱にいた時である。同社には明治15・6年（1882～83）、英人機械技師スコットが自費を投じて建てた煉瓦倉庫（昭和21年頃、内部を改修して冷蔵庫になった）があり46年、老朽化に伴い解体した。解体中、同氏は二度ほど来社し、自分が調査した愛着からか、消え去ろうとするを惜んでか、社員たちの前で、さりげなく話だした。同倉庫の構造、また古建造物などの保護について2時間ばかり述べた。

当時は古建造物に関心がなかった我々社員は、始め余り気乗りしなかったが、つい熱弁にひかれ耳をかたむけ、あらためて保存の大切さを知らされたのである。そのお蔭で解体の煉瓦、鬼瓦、屋根瓦、金具類などを保管でき、一部を会社から市立博物館に寄贈した。

川嶋さんの第一の功績は、何と言っても昭和30年代から研究調査した函館の古建築である。その成果を46年、『はこだての文化財』―古建築編として発刊発表し、保存の必要性を広く認識させ、更に外国にも同誌が送られ紹介された。

函館市文化財保護条例は、37年3月施行されたが、参考までに函館の建造物の文化財指定を述べると、国指定の最初は38年に3件、市指定は市条例施行から実に17年も経過した54年で、これが最初である。

同氏は文化財審議会の会合では、いつも適切な意見

先　生　を　偲　ぶ

を述べ、さすが、という印象を受けていた。

函工建築科科長を通じての在職中は、千数百人の建築士を養成し、その功により北海道建築士会の名誉会員に推挙され、また北海道教育委員会、渡島教育長、財団法人教育振興中央会などから、郷土文化の貢献と永年の産業教育に対し感謝状がおくられた。

51年には道文化財保護協会から、文化財保護功労者として表彰され、56年には建築士会合同秋田大会で輝かしい連合会長賞をうけた。

文化活動としては、函館市文化財保護審議委員（58・10調査委員を審議委員に条例改正）を永年務め、その後伝統的建造物群保存対策協議会専門委員として現場調査に当たった。函工退職後は、函館短期大学講師を務めるなど、忙しい日々であった。

同氏は函館ばかりでなく北海道の建築文化財の識者として欠くことのできない存在で、これからの文化財保護活動に期待するところが多かったのに、平均寿命より下廻る67歳での御逝去は、まことに残念の極みである。今は、ただ旺盛な責任感と、たゆみのない調査研究心に富まれた同氏を惜しみ、業績を讃え、安らかな御冥福をお祈りするのみ。ここに一文を捧げ先生の在りし日を偲び追善供養とする。合掌　（運営委員）

佐　藤　利　男

憧れの函工高建築科への入学、不安と希望とに満ちていた気持の始めての登校の日、建築科長であった川嶋先生の紹介を受けた。例の独特の口調ですから面白い先生だなあと思ったり、随分と恐い先生だなあと思ったりで、緊張で堅くなっていた胸を騒がせたりしての、師との初めての出会いでした。

「高校は義務教育ではないのだから厭な者はすぐにやめてもらう」とか「見込みのある者、よく良くなってもらう為に生徒をぶつ事もある」等と言われ、とにかく、おっかない先生だとの感を深く持った。

在校中のほとんどの建築科の生徒は1度や2度は愛の鞭と称する一撃を受けたものでした。

教師のタイプにもいろいろありましょうが、とにかく体当り的に生徒に接してくれた様に思う。

又、私の中学時代の担任の先生は常に竹の棒を持ち歩き、何かの時には、その生徒とにらめっこをし、その先生自身の頭を、その棒で力いっぱいポカリとやる。打たれるよりも生徒自身には、その痛さを感じさせ、自然と頭が下がってしまう事でした。

生徒に対して、教育というものに対して全身で当たっていた当時の先生方には、職業という枠を越えての活動に感謝の気持でいっぱいである。

私は良い先生に出会えて本当に幸せだったと思っている。

その函工を卒業後数年の間、川嶋先生宅にて助手として仕える事になりました。

当時、函館近隣のというより道南地方一帯の学校建築を設計されていたそのお手伝いである。

生徒の学年に応じた活動等をも考慮してのプランニングや、より多くの物を見たり、追求したりの設計態度には深く感銘する事でした。

各地を歩いての資料や本等の入手には殊のほか力を注ぎ、又、失敗も多かった様ですが、スライド等を撮っては、生徒に見せたりしてくれていた。

家庭よりも学校の生徒に対して一生懸命で先生という職業の大変さに深く感動したものでした。

他の地方や都市を見て歩く度に、函館の長所、短所とか、特殊性というものを実感されていたように思います。

新建築を設計する為には、古き歴史を知る必要ありとの事で、古都等へも随分と足を運んでいた。

温故知新という事をその折に教えられた。とにかく知識を得る為には貪欲にとびつき、頼りは、自分以外なしという人生哲学を持って進んできた先生でした。

家庭生活を返り見ず、自分の建築追求への道を一途に登っていました。

当時私は、吉川英治の宮本武蔵を読んで感銘を受け、その姿を先生に見た思いでした。

函館を、こうしようとか、ああしたら良いとか思いつきにしては突拍子もないと思われそうなアイディア等をよく口に出していた。

函館を思えばこその発想、発言もその形を見る事なく消えてしまったのか。

当時の私に先生の何分の一かでもその探究心があったなら、それらをメモでもしていた事だろうにと、今になって残念に思えてならない。

先生のスケッチ等にでもノートされていて欲しいものと願っている。

幸にして先生の四男、紀夫君が函館で建築設計業をしているので、その力を借りて埋れているであろう資料等の整理をさせて頂きたいものと思う。

それは単に我々が見せてもらうとか利用するとかいうのではなく、我が街函館のより良い街への発展に、そして文化の香り高い街へのアプローチとなるであろう事を確信している。

文化財としての価値観で函館全体を高く評価していた川嶋先生の熱意を、歴風会の皆様共々、先生の遺志として受継ぎ、郷土愛を深く大きなものへと、発展させたいものです。

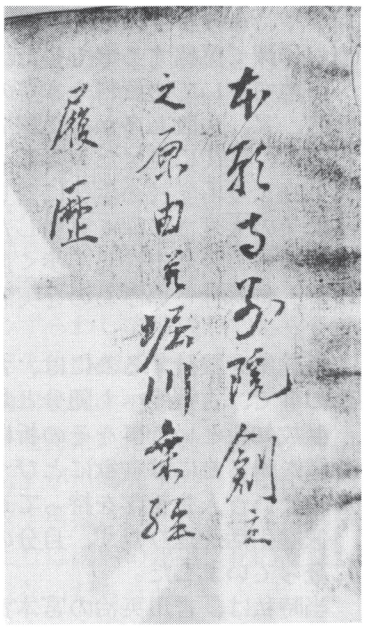
川嶋先生の御冥福をお祈り致します。

㈱ 真建築設計事務所

願乗寺と願乗寺川（二）

明石信道

法恵が蝦夷に真宗本派本願寺の寺院を建てようと志し、実現したことは宗教史上に特筆すべきことであるが、それ以前に本願寺派本山に開教の動きがあったのか、それとも無かったのか ── 手元にある故壽都別院初代輪番になった法恵次男の誠顯（後に堀川恭榮と改名）の手記による「本願寺創立之原由　堀川乗経履歴」（図１）のみでは、やや心もとなく感じていた。幸い昭和５０年夏に、これら事項に関し、郷土史家で宗教史家で宗教史研究者の永江雅俊氏から豊富なる資料の提供が寄せられていた。これらに松前史年表と函館商工会議所の平田淳二氏著『函館経済史』を加えて参照した。── 北海道の始まりは鰊や鮭の漁獲に始まると想われるほど鰊・鮭・昆布などの水産物の獲れる処に人は集まり、商いが盛んになったと思う。換言すれば、獲れる処に出店や出稼ぎの人々が多いということだ。松前然り、江差然り、箱館も然りといっておこう。箱館は安政２年から数年というものは、鰊は大漁であったと記されてある。まことかと疑って筆者は入舟町や辨天町の古老に聞いたのであるが、その頃入舟町の浜や押付浜など、春先になれば鰊の産卵で岸辺は白変したと伝えられていた。年表など調べると松前以北の鰊漁は元禄末期から宝永中期・享保・宝歴にかけて豊かに、安永に至って少なく、さらに天明の頃は飢饉に加えて凶漁が続き、寛政には更に苦しみ、文化・文政に漁は少々ながらも持ち直した。次第に、漁はこの頃から西海岸より東海岸に移ったと伝えられている。漁の豊凶は一定していないが、人の出店は定着して不動であったらしい。ここで出店の動静の一面をのぞくことにする。



誠顯・（法恵次男）の手記による「本願寺創立之原由ならびに堀川乗経履歴」

資料のうちの「本願寺史二巻」によれば、天保４年に松前江差の歓喜講から本願寺本山宛に「講中印書を頂戴して謝奉ります」とあった。天保の頃は江差に寺はなくとも「講」というものがあり、さらに「西道場」なる建物があった。よく文献には西道場の名が示されているところからみれば、当時は名のある存在であったかもしれない。「道場」というものは、履物を脱ぐ土間があり、一段と高く外陣に当たる座敷があり、その六畳に加えて左右に四帖間があって内陣は外陣の半分位に面積し、その場所に阿弥陀立像軸か六字名号の軸が飾られた平家造のものであった。道場は佛道を説き佛道を修むる場所という定義はあるが、住居でなく、寺でもなかった。江差の場合は宗教中心の寄り合い場所であって、現代語のコムミニュティ・センターに近いものと解してよいだろう。前記のように江差の講は本山から講名と印書を賜り講員一同もまた上納をしていた。その講員名には種島卯左衛門・井筒屋久七・富江屋藤七と同清七などと名を連らね「江差十二講」の講名を改め「江差歓喜講」と本山から与えられた。講員は実際に３０名あったという、なお、この講は享保３年（１７１７）に始まり天明期まで１２０年以上も続いたというのだから、驚くべき長年月にわたり続いたものと改めて驚くと共に江差の門徒の宗教熱は松前より自由な気分で遙かに上廻っていたことに注目したい。また江差の鰊取りは延宝６年の江差の桧山の頃と同時代であったことも驚く。このような古い時代から長年月を経たのであるから、出店の消長、死亡、相続廃店・移宗・断絶の変化は避けられない必然はあったろう。江州の善照寺門徒の井筒屋九右衛門・富江屋藤七などの江州者隆盛のときは栄えたが、その後隆盛と衰微は幾度も繰り返され安政に復活するに至った ── 天保４年（１８３３）に兵庫県出石郡東町平田専福寺入真坊大虫は広如上人の特命をうけ身分を秘して蝦夷にわたり、松前や江差の一般情勢から出店・出稼の動向を偵察して本山に報告していた。── また天保５年（１８３４）２月に井筒屋・富江屋が代表印して「松前に出店を３ケ所出しました、来往する門徒が多く末寺もなく不本意ながら他派に転宗せざるを得ません。全く歎かわしい次第です。本願寺さま、掛所でもよろしく御造り願奉ります」と願書を提出。本山も「神妙なり」と答え、その趣旨にもとづき、願状を添付し江戸寺社奉行に願出たのであるが何の返事も得られなかったと伝えられている。── 嘉永３年から嘉永６年頃まで、本山は世情騒然の黒船来訪による鎖国主義放棄かまた一戦交えるかのときに、江戸林光寺弟呼寺号成覚寺僧祥を蝦夷に派遣して密かに実状を探らせた。余り目立った報告はない。騒然たる松前の上下の騒ぎと

専念寺が目下無住であることなど判明したに過ぎない。本山はその報告をうけながら、江戸在藩高田源藤太に、横超寺・興楽寺を加え、本山役員島田左兵衛權大尉ら一同で、対幕府の献案を熟議したが、余り結論らしき結論は得られず、とにかく実在する門徒を立證するために、近江・越前・紀伊に達書を送り、蝦夷地の出店数・出稼人員数の調査するように命じたのである。それにより準備を始めたが、時日を経るにつれ幕府は未だ考えもされなかった内憂外患のためだろう、蝦夷地寺院建立案を顧るいとまがなかったのである。―しかし本山は建立案を次々と考え、嘉永４年（１８５４）といえば法恵が川内村願乗寺に帰郷し、信子を嫁に迎え、長男の微雲が誕生した年であった。本山はその私的実状も確めずに、奥州の願乗寺を蝦夷地に引地しようと案を本山内の某氏から提唱された。しかし建案は具体化されずに終わった。……資料を調べる度に本山の竝々ならぬ努力と蝦夷地の門徒の熱望の長期間に亘り展開された物語は涙ぐましいことの連続であったと記さなければならない。

法恵は約２年半の蝦夷地偵察見聞を終え、川内村の願乗寺に戻ったのは天保１４年（１８４３）の秋であった。一息入れて入口の戸を排し薄明りで内部の座敷を見廻わした。旅立ちの頃より部屋の天井も壁も造作も煤によごれ黒じみでいた。「ヤァ…戻ったよ」と呼び声をかけると、炉の傍に安坐していた兄秀道は「ウン…これあタマゲタ」と驚きの声。座敷にあがるや否や、法恵は佛壇の前にゆき、点燈をして献香し、合掌そして禮拝の後に、炉の客座についた。間もなく、表から母の諦子が帰ってきた。一抱えもある泥まみれの野菜を小脇にかかえ、それを土間に置き、手を拭き炉辺に寄ってから「オカエンなさい…」としげしげと法恵の日焼けした血色のよい顔をみて微笑んだ。ほんとなら喜びの余り抱きしめたい気持であったろう。心を押えに押さえ「よく帰ったねェ」「ほんとに…」「便りはナモ無かったねェ気にはなっていたが…」「ほんとによかったエ」と。母の言葉は「よかったエ」と「ほんとに」の連続であった。村の法事があれば、たいてい秀道と二人でゆくか、秀道一人でゆく。おつとめを済ませ、二人して細々ながら生活を立てていたという。秀道は下北の寒さに弱いのか、時々よく風邪をひいたことや、「願乗さま」といって寄合が月に一度位あった、村衆が魚や蔬菜を「少ないが…」といって届けられては念佛禮拝に来たことなど次々と母は話を続けた。法恵は法恵で何から話してよいかわからなかったが、蝦夷地を歩き箱館・松前・江差・オタルナイその他奥地とおぼしき辺りまでの踏破順に、見たり聞いたままを、ボソボソと話した。やはり胸を占めているのは箱館の国領家の菰被りの鐘が第一に心に浮び、ついロに出た。―ここでこの梵鐘について横湯通之氏の考證文を筆者は紹介しておきたい。氏曰く、真宗寺院は安政年間に始まるという説を挙げているが、幕府の正式認可は安政４年であるから安政期が正しいと考えたい。それはそれとして、真宗蝦夷地寺院建立にも論議をよぶ横湯氏の梵鐘銘の解説は興味がある。法恵はおそらく国領家の鐘は菰被りであったために銘はみていなかったと思う。その梵鐘銘は「南無阿弥陀佛」と記され左に宝永三丙戌年八月二十一日・施主当町大町国領平七、次に和泉国施主河盛仁平、次に大阪鋳冶・岸本七右衛門と彫られている。宝永三年といえば松前藩主矩広時代、高龍寺が亀田から辨天に移転した年であった。氏は文を更に進め、国領家は江州国領村の本願寺門徒で、江州出身の藤野四郎兵衛や紀州出身の栖原角兵衛と門徒三人組であったが、松前藩の指令で東派門徒に一時は転じた。後年本願寺派に復帰したと記されてある。河野仁平氏は堺市の本願寺派の古い門徒で『梵鐘を蝦夷に送った事実はあるが蝦夷の何處に廻したかわからない』という。鋳工岸本氏に就いては不明。鐘は国領氏が孤舟に積んで運び、後に願乗寺に寄進し、後日西別院に移されたのが真相のようだ。ここで宝永３年に国領家が箱館に出店を構えたのか、鐘名は後彫りではないか、鐘は明治４０年と昭和９年の大火で当初の原品であるか、疑問を次々と私はもつ。検証したことのない私はこれ以上記す事は出来ない。……帰郷の法恵は胸中に鐘が響くように母と秀道を相手に話は続けたのである。（図２）

願乗寺（後の本願寺函館館別院）に寄進された鐘銘の一部

（早稲田大学名誉教授）

道南における鉈彫仏像について

═上磯の円空仏と伝「目定」仏═

西　野　平　治

1. 円空の生涯

年譜によると寛永9年（１６３２）美濃国に生まれる。俗名不詳。元禄8年（１６９５）7月１５日入寂となっている。死亡年月日は墓石にあるが、出生の正確な年はわからないので「６４歳で没す」は仮説で、不明の部分が多い。

2. 円空払について

造像時期は寛文年間から元禄期の約３０年間で、蝦夷に滞在した寛文6年（１６６６）～寛文7年の2カ年は仏像を彫り始めて3～4年の初期作である。道内にある円空仏は同一の顔かたち、姿の観音像が多い。

3. 円空が仏像を刻みながら布教した

円空は天台宗で本地信仰（神の本地は仏である）からくる意図があった。その土地の神や山の神の本地として本地像を造ったのである。地神を供養するのであって、礼拝仏ではなく、彫って与え施す奉納仏を造像したのであった。

4. 円空仏の特徴と芸術性について

原木を二つに割り、前の半円面に仏像の正面が刻まれ、背面をみると丸太を平たく鉈で荒削りしたまゝで、横からみると片平で薄いが、真正面からみると迫るような立体感があり、仏像の厚みがないわりには、奥行と量感が豊かである。彫りは克明で、衣紋の表現が穏やかで、浅い筋彫りで仕上げられ、修行からくる厳しさ、純粋さを感じさせて彩色もない。

大陸から渡ってきた芸術の模倣をすてゝ、自由な表現で、荒削りのまゝ完成されているところに、素朴ながら芸術作品として高い価値を持つと思われる。

5. 上磯における円空仏の由来とエピソード

(1) 曹溪寺の観音像

この観音像は北海道で発見された最初の円空仏であるが、顔面を鉈で削りとられたといういわく付きの受難の観音像である。

曹溪寺先代住職の佐藤即心さんの語ったところによると、この像は、祀っていた人の息子がコレラにかゝたので、円空仏に快癒を祈ったところ、願いかなわず死亡してしまった。それで親が「効験なかった」と怒って、鉈で顔面を削り、窓から外に捨てゝしまった、といわれているものである。これを拾った人が、自分の家の仏壇の脇に置いて拝んでいたものであるという。その人が樺太（サハリン）に移転する際に、前記の小祠に置いていったものらしい。近くの寺小屋に通っていた子守りが、子供が泣くとこの円空仏をおもちゃに与えて遊ばしたそうである。

仏像の蓮台が毀傷しているのは、当時の人々の伝承によると、「蓮台を削りとって煎じて服用すれば病気にご利益がある」せいであった。

(2) 富川八幡宮の観音像

円空仏は背銘が少ないが、この像の背面には梵字と思われる墨書のあとが、かすかに残っている。判読はできない。この観音像の顔はかなり傷みがひどいが、古老の話によると、子供達の遊びに人気があったので、なわで結わえて海岸を引いて遊んだ時の傷みか、あるいは海岸に流れついたときの傷みだろうとも云われている。

円空仏は衣をまとった木彫仏であるから、着衣の必要はないのだが、それでもなお着装させていたらしい。誰れかが着衣をとったところ、Kさんが「円空仏が夢に現れて寒いといった」というので、翌朝仏像を見にいったら着物がぬがされてあった。それで以後また着装させたということである。

(3) 上磯八幡宮の観音像

この像はいつ奉納されたか不明であるが、昭和１２年円空仏であることがわかり、昭和３９年に町の有形文化財に指定されている。

この像は、いたみがなく完全なものであるが、蓮台の底部の高さが揃っていない。巷間伝わるところによると、厨子をつくらせたところ、厨子の方が少し小さくて仏像が入らなかったので、大工が仏像の台座を鉋で削り無理に納めたからだという。この大工は翌日から尻を病んで死んでしまったという余話がついて残っている。

(4) 伝「目定」仏について

道南の西海岸から周辺にかけて多く発見されているが、在銘のものが見つかっていない。造像の年代、作者名も知る手がかりがない。目定仏研究の第一人者である森川不覚氏は１４４体を確認している。その後私が6体発見しているので、まだ民家にひっそりと祀られているものも多いのではないかと思われる。

目定仏は庶民的で親愛感のある素朴な像で、眉が円満な孤をえがき、その下の眼も左右対称に切れながにきざまれている。

衣紋の彫りかたが規則的で整然と刻まれ彩色されたあとが残っている。

（上磯高校教諭）

函館の氷について

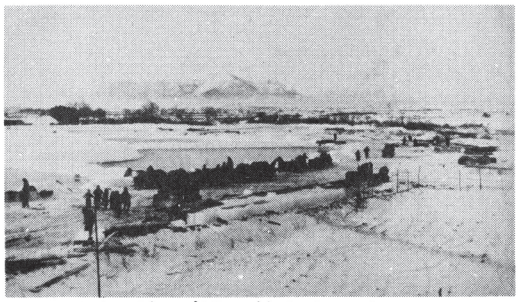
小沼　健太郎

氷の歴史

氷についての一番古い記録は日本書記、仁徳天皇（３７５年）の氷室の記事で、続いては、大政官符に記された、孝徳天皇（６５０年）陰暦６月１日に群臣に氷を賜わった記録がある。

奈良時代には、陰暦の６月１日氷室から取り出し宮中に献上された氷を臣下に下賜される「氷室の節会」とという儀式が行われていたことで知られている。

平安時代には、毎年正月元旦の「朝賀の節会」に製氷、貯氷、氷の厚さの様子と農作物の豊凶の予想が奏上される習わしがあって「氷が薄い年は凶作が予想されるため、早速勅祭をもって天下泰平、五穀豊饒が祈願されていたという。この時代の随筆家である清少納言は枕草子39に上品なもののひとつとして、「削り氷の甘づらに入りて新しきかなまり、に入りたる」とのべている。



田本研造写真集　神山村の氷切りの図

時代が下って江戸時代、奈良、平安の風習が受けつがれたものであろう加賀前田侯は江戸将軍家へ陰暦６月１日、氷雪の献上を行っていた。（江戸年中行事）俗説によれば、家康は、ボルトガル渡来のテンプーランと氷水を食べ過ぎて下痢をおこし、これが原因で死亡したとも言われている。

函館と天然氷

天然氷が朝廷、幕府などごく一部の人々によって神事あるいは、飲料として使用されたことは前に記したが、夏場などとうてい庶民の口に入る物ではなかった。江戸時代の末頃になり、やっと来日中の外国人や日本人の金持の一部が主として医療用に使用するようになったが、この時の氷はボストン、アイスカンパニーがはるばる米国から輸送した氷で、ビール箱１箱ぶんが３両という高価なものであった。

こうした状況に着目した愛知県生まれの中川嘉兵衛は、文久元年（１８６１）の富士山を皮切りに氷の製造に取りかかり、以後本州各地で失敗すること五度にも及んだが、くじけず６回目に挑戦するため函館にやって来た。

一方函館では、慶応年間（１８６５～６７）より外国人により願乗寺川の氷が切り出され貯蔵されたり、ブレッキストーンにより現在の東雲町電話局付近の願乗寺川で製氷が試みられたりしていた。このような製氷状況を参考としたものであろう。中川は慶応３年（1867）早速、願乗寺川のわきに３千坪の氷池を作り２５０屯の氷を得、この氷を函館から横浜に始めて移出した。始めての経験のためロスが多く、かつ諸経費がかかり過ぎ損失であったと云われている。

中川はその後、ブレキストーンの忠告により英国人のジョージを雇入れ、明治２年から五稜郭で製氷を始め種々の苦労はあったが以後製氷事業を企業化することに成功している。

江戸時代末頃から横浜で氷の独占販売を行っていたボストンアイスカンパニーは、中川製造氷の販売を種々手段で妨害したが、中川は製氷技術の考案や米国製器械の輸入などにより、着々と地盤を固め明治２年から明治２０年頃まで、中川氷の全盛期をむかえ、宮内庁御用達となるほどであった。

その後、中川の製氷に刺激された人達によって明治１４年頃から試作されるようになり、明治１６年東川町で小沼庄助、明治２２年石川村、村井文治、明治２８年桔梗村守田岩雄によって製氷が行われるようになった。

伐氷場についても明治２年から五稜郭が中心であったが、明治22年以後、亀田、鍛治、石川、中道、神山などに広がり、明治２５年７カ所、明治３５年１２カ所、明治３８年２４カ所と急増していった。

明治２０年頃亀田、神山、鍛治、石川などの諸村では、冬場は鯡場等へ出稼ぎに行くのが普通であったが、氷切や輸送の仕事ができるようになったため１年中地元で働くことが可能となり地域の人々に感謝されたと云われている。

その後、氷製造事業は発展の道をたどったが昭和時代に入り人造氷の製造が発達したため昭和１０年頃より急速にその生産は減少していった。

中川嘉兵衛製造の氷

（中川嘉兵衛　其採氷事業を参考とする）

年	屯数	年	屯数
明治３年	６００屯	明治11年	3,２００屯
〃　４年	６００	〃　12年	1,８００
〃　５年	1,８００	〃　13年	1,８００
〃　６年	1,２００	〃　14年	2,３７０
〃　７年	1,４００	〃　15年	3,４００
〃　８年	2,３００	〃　16年	3,１００
〃　９年	1,７００	〃　17年	3,１００
〃　10年	2,４００		

（函館市立本通中学校教諭）

～おしらせコーナー～

浜島国四郎先生（当会副会長）が町並み問題と深くかゝわる、函館市文化財保護審議委員になられました。心強く喜びに堪えません。歴史的環境保護と、その活性化、当世風の言葉で言えば、アーバン・ルネッサンスへむけ一層のご活躍を期待してます。

～えつらんコーナー　おすすめコーナー～

○箱館戦争のすべて、須藤隆仙編、新人物往来社一疾風怒濤の歴史の転換期、維新において箱館戦争は何であったのか～多彩な執筆陣、豊かな資料、文献、年表等も収録
○やわらかい都市、梅棹忠夫、上田篤編、講談者、21世紀の都市の未来像をさぐって。
○都市の個性とはなにか～都市美とアーバンデザイン、田村明著、岩波書店。
○わたしたちの函館山、南北海道自然保護協会発行、以上の問い合せ先は田尻(57-1172)

＝会費納入のお願い＝

3月が決算期になっておりますので58年、59年度未納の方は何卒ご協力をお願いいたします。郵便振替一函館630一又は拓銀昭和通支店026-293-407宛先は函館の歴史的風土を守る会、住所は千代台町20一18です。

第5回ふるさと写生展（59年9月9日）

入賞者は次のみなさんです。ご参加ありがとう。

賞	氏名	学校名等
函館市長賞	林　昌輝	谷地頭小
函館教育委員会賞	木村幸恵	〃
函館市美術教育研究会賞	矢野智大	本通小
NHK賞	石井淑子	〃
	川上学史	〃
HBC賞	星　めぐみ	〃
北海道新聞社賞	五十嵐里絵	谷地頭小
朝日新聞社賞	松崎久実	本通小
毎日新聞社賞	伊藤マサキ	〃
読売新聞社賞	窪田里子	谷地頭小
歴風会賞	古谷かおり	駒止保
	古谷美知世	彌生小
	伊多波久絵	高盛小
	相馬勝子	柏木町
函館ライオンズクラブ賞	山口菜穂子	本通小
	北市さとえ	谷地頭小
	福原広輔	〃
	中村大裕	本通小
サクラクレパス賞	山内裕之	万年橋小
	松本裕子	中部小
	梅村幸生	〃
	原田麻美	谷地頭小
	阿部美那子	青柳町

事務局だより

★59年10月7日　みちのくの歴史的町並み　弘前を探ねました。
青森駅で小杉先生が私共20名を迎かえて下さいました。
NHKブックス「歴史の町並み　東北篇」の執筆者小杉先生と言う名案内者に恵まれ、短時間でしたが有意義で楽しい巡見をしました。
弘前城、最勝院、こみせ、伝建地区、若党町界わいの景観など城下町、弘前の風格あるたたずまいにふれることができました。

★60年1月25日午後6時から、函館の町並みを美しくする新春チャリティパーティがホテル法華クラブで開催されました。この催しには会員、一般の方、歴風文化賞受賞の個人団体と来賓皆様方300余名の参加をいただき盛会裡に終了いたしました。
この催しのオークションに御賛同をいただきました商社及び諸先生に厚く御礼申し上げます。
なお、この催しの実行委員長村岡武司さん副委員長児玉幸子さんと運営委員の方々の御苦労に対し感謝いたします。

★60年2月2日午後1時30分からNHK函館放送局で勉強会を開催いたしました。会員及び一般の方々の御参加を得て盛会でした。
なお、勉強会の内容は下記のとおりです。

1. 上磯の円空仏と伝目定仏について
　講師　上磯高校教諭　西野平治　先生
2. 函館と氷
　講師　函館市立本通中学校教諭
　小沼健太郎　先生

編集後記

町並みチャリティーへご参加下さった方々の支えで今年も僅かですが町並み基金を生みだすことができ感謝しております。しかもこの行事を通し町並みや自然など環境の質そのものへ市民的な関心が高まりつつある事をもれきゝ喜んでおります。かってチォリティーにご出席下さった、ありし日の川嶋先生の笑顔が偲ばれます。今回、先生を悼み当会への馳駆を多とし編集させて頂きました。最後にご多忙にもかゝわりませず玉稿をお寄せくださいました皆様へ御礼申し上げます。
（田尻）